

天使たちの課外活動9

オーロラ
極光城の魔法使い

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

天使たちの課外活動9

極光城の魔法使い

ジョゼフィン・カーター●ランディの母親

パトリシア・グラント●ランディの母方の祖母

ジャスミン・クーア●元クーア財閥二代目総帥、複雑な事情から四十年間眠りっぱなしだった 一部で女王と呼ばれる

ケリー・クーア●元クーア財閥三代目総帥、複雑な都合から若返っている 一部で海賊と呼ばれる

ジンジャー・ブレッド●第一線で活躍する共和宇宙一の大女優、ジャスミンの親友

ニコラス・バーナード・ハリソン●通称ニック、映画監督 以前ジャスミンにかかわったせいで映画がお蔵入りにされた

クリス・レイモンド●曲芸チームリーダー

サミュエル・スプリングフィールド●舞台監督

リィ(エディ)●アイクライン校の中学二年生 かなり複雑な理由で、一流の戦士の腕と魂を持っている

シェラ●アイクライン校中学二年生 とても複雑な理由で暗殺技術は超一流

ルウ(ルーファ)●サフノスク大学構造学科所属 実は宇宙創造にかかわる人外生命体

レティシア・ファロット●チェーサー高校二年生、セム大学医学部にも所属 ものすごく複雑な理由で元暗殺者一族の最優秀暗殺者

ライジャ・ストーク・サリザン●キャンベル大学の宗教学部所属 惑星トゥルークの僧侶

ハンス・スタンセン●課外活動の一環でライジャに芝居参加を熱心に勧誘している

登場人物

ヴァンツアー・ファロット●プライツィヒ高校二年A組所属、
超絶美形の優等生 かなり複雑な事情があり、元凄腕
の暗殺者

◎二年A組の生徒たち

ローズ・アボット●クラス代表、プロデューサー総制作者兼舞台監督

ベアテ・ノルマン●オーロラ『極光城の魔法使い』脚本・演出担当
演劇部所属

マイケル・ケント●通称ミック、アウローラ役に立候補する

スティーブ・バリー●演劇部所属、アウローラ役に立候補する

ランドルフ・カーター●通称ランディ、アウローラ役に立候補する

サマンサ・ライト●手芸部所属、衣装担当

◎プライツィヒ高校生

シドニー・エイブリー●通称シド、演劇部代表 三年

ユージン・ラングフォード●級議長（他校における生徒会長）

◎オーロラ『極光城の魔法使い』キャラクター

アウローラ●囚われの姫君

アウレーリオ●流浪の騎士、アウローラを助け出すと決意

ザアラ●極光城の主、悪い魔法使い

ドルガ●ザアラの息子

ビアンカ・ローリンソン●ホーマー大学生、数少ないヴァン
ツアーの女友達

ブリジット・ローリンソン●ビアンカの義母

ロジャー・カーター●ランディの父親

1

ヴァンツァー・ファロットは手を上げて、真顔で発言した。

「俺は裏方に回る」

途端、プライツィヒ高校二年A組生徒全員の眼がいつせいに彼に向けられた。

驚愕きょうがくではない。露骨ろこつな非難の眼差まなざしだった。

『呆あきれてものも言えない』視線でもあった。

司会きようだんとして教壇に立っていたローズ・アボットも、盛大なため息をついて首を振った。

「申し訳ないけど、ヴァンツァー。それはクラスの総意として却下するわ」

ヴァンツァーは怪訝けげんそうに首を傾かしげた。

端麗たんれいな顔には理解に苦しむ表情が浮かんでいる。

「希望を述べると言わなかったか？」

確かにローズはたった今、クラス全員に『自分の希望を言つて』と告げたばかりだ。ヴァンツァーはその言葉に従ったただけだが、ローズも譲らなかつた。確認するように問いかけた。

「この会合ミーティングの趣旨しゅしは理解してくれている？」

「学園祭の出し物についてだろう」

「そうよ。プライツィヒ校は一年生から三年生まで全十五クラス。基本的にはクラス単位の発表だけど、部活や同好会と掛け持ちする子もいるし、クラスの中で二つ、時には三つの発表に分かれる場合もある。内容は吹奏楽やバトントワリング、演劇部などの芸能系、写真部、美術部、手芸部、天文・地理研究部などの展示系、飲食系やアトラクションなどもある。ただし——」

ローズはここで力を込めた。

「二年生は毎年、クラス単位での演劇上演と決められている。学園祭は生徒のお祭りには違いないけど、

クラスの団結力や行動力を試される場でもあるのよ。生徒はもちろん来校者にも投票券が渡されて、気に入った出し物に投票することが出来る。ここでのくらしい票を集められるか、すなわち高評価を得られるかは、試験の成績に負けず劣らず重要視される。一番人気だった出し物は学校から表彰されて内申書にも影響する。つまりこの演劇は二年A組の総力をあげて成功させなければならないわけ。ここまでは理解できる？」

ヴァンツァーはむしろ怪訝そうに問い返した。

「俺はそれほど理解力がないように見えるのか？」

「それじゃあ、もう一つ質問。あなた、自分が校内随一の美形だつて自覚ある？」

ヴァンツァーは少し考えて、慎重に答えた。

「目鼻だちが多少整っているのは自覚しているが、随一は言いすぎだろう」

今度こそ、クラス全員の口からため息が洩れる。

男子はますます呆れたような眼を彼に向けた。

「多少って……」

「控えめにも程があるだろ……」

「自覚があるだけ、まだましな気もするけどな」

女子たちはその言葉に頷きながらも、苦笑半分、諦め半分の、何とも複雑な顔になっている。

女生徒の誰よりも美形だ——とは、本人の不興を買う恐れがあるから言わないだけだ。

ローズは毅然として話を続けた。

「上演時間は十五分。舞台の準備、撤去に三十分。

内容はオリジナルでも有名作品のダイジェストでも自由だけど、この短い時間で確実に盛りあげるには、知名度の高い作品のほうがいい。そこで当クラスは『極光城の魔法使い』のクライマックスを上演する。脚本・演出は演劇部のベアテが担当」

ローズの横に立っていた女生徒が軽く会釈した。

「脚本っていうけど、話自体はみんな知ってるんだ。十五分で収まるように練り直して、いいところだけを聞いた程度だけだね」

ベアテ・ノルマンはひよろりと背の高い、痩せた少女だった。口調も視線もどこか淡々としているが、冷たいわけではない。演劇に関してはむしろ熱心に突き詰める性格だ。

ローズは対照的に小柄で丸顔で、ぼつちやりした身体つきだった。明るい性格で、成績も運動神経もトップクラス、クラスの代表とも言うべき級議員を務めている。

そのリーダーシップを遺憾なく發揮して、彼女はヴァンツァーに向かって断言した。

「あなたは当然、アウレリオよ。ヴァンツァー」
宣言されても困るので、ヴァンツァーは確認した。

「舞台上で演技をする役ということか？」

「当たり前じゃない。主役の一人よ」

ローズが答えると、ベアテも呆れたように言った。
「率直に言わせてもらえんならだ。その面を裏方に配置する意味が理解できないんだよ」

同級生の顔を指して『面』と言い切る。いささか

失礼な物言いだ、誰も異論を唱えなかった。

当のヴァンツァーも抗議しなかった。

別の女生徒が手を上げて質問する。

「でも、ヴァンツァー、演技経験はあるの？」

「ない」

素っ気なく答える。それでも、ベアテもローズも引き下がらない。

「学園祭は名前のとおり、生徒たちのお祭りなんだ。何も玄人のような演技力が要求されるわけじゃない。練習する時間もある。とはいえ、現時点でどの程度やれるのか、演出担当としては確認しておきたい。そこで、今からオーディションをやりうと思う」

ローズが生徒たちを促す。

「みんな、端末を見てくれる？」

高校生は個人的な端末を持つことが許されるが、彼らが今見ているのは学校から支給される授業用の携帯端末だった。そこに台本が送られてきている。書かれているのはほとんど台詞だけだ。

『アウレーリオ』と『アウローラ』のやりとりだが、普通に生活していたら恐らく一生、口にすることはないであろう情熱的な愛の台詞が続いている。

ベアテが少し弁解するように言った。

「山場だけを抜いてみた。まだ構想の段階だけだね、だいたいこんな感じ」

ローズはいつもの彼女らしくもなく、憚^{はば}るような口調でヴァンツァーに問いかけた。

「どうか。端末を見ながらでいいから、ちょっとやってみてくれない？」

台本を読んだ生徒たちの反応は様々だった。

「この台詞、ヴァンツァーに言えるのか……？」

「永久凍土の貴公子には無理じゃないか？」

と、顔をしかめたり、苦笑したりする生徒や、

「そこはほら、面頼^{めんたの}みってことで……」

「顔がいいって得だよなあ……」

と、大げさに嘆息^{たんそく}する生徒もいる。

「いっそ、棒読みでもいいんじゃない？」

と、半ば諦めの境地に達している女生徒もいる。ヴァンツァーは無言で台本に眼を通していたが、顔を上げて、またしても特大の爆弾を落とした。

「得票が目的なら、男女逆転劇はどうだ？」

教室内の空気が凍りついた。

女生徒たちはほとんど全員が（多大な努力の結果）無理やり悲鳴を飲み込んだ。

なぜなら、女子の『黄色い声』に対する彼^{ヴァンツァー}の態度を、同じクラスの彼女たちは知り抜いている。

あの氷の視線に刺^さし貫^{つらぬ}かれるのだけは勘弁^{かんべん}！ と、心は一致しているが、表情は様々だ。

『見たい！』と、興奮に眼を輝かせる女子もいれば、『そんなのいや！』『見たくない！』と、悲愴^{ひそうかん}感を露^{あらわ}わにする女子もいる。

ローズがおそろのおそろ確認した。

「あなたが……アウローラを、やるってこと？」

当の本人はまったく抵抗を感じていないようで、平然と続けた。

「会合の前に、学園祭の舞台形式について予習した。男女逆転の芝居しばいやファッションショウはかなり票の取れる演出だと書かれていたが……違うのか？」
「違わない。」

高校生が手っ取り早く『受け』を狙うには定番の出し物と言えるが、ローズは首を振った。

「ヴァンツァー。悪いけど、それも却下」

「なぜだ？」

本人だけではなく、硬直の溶けた教室内からも、ちらほらと異を唱える声があがった。

「決めつけなくてもいいんじゃないか？」

「そうだよ。彼のアウローラなら絶対、受けるぜ」

「人集めには最適だよ！」

ローズは苦い顔でクラスメイトに説明した。

「却下の理由は二つ。まず一つ、男女逆転劇おもの主狙いは笑いをとることよ。女子の男装はともかく、男子の女装はその滑稽こっけいさで観客に笑ってもらうのが目的と言っても過言じゃない。だけど、考えてみて。

彼が女装しても全然笑えないのよ」

クラスを代表して、本人が再度尋ねる。

「なぜだ？」

「絶世の美女ができあがるだけだからよ」

ヴァンツァー以外の生徒が揃そろって頷いた。

女子の一人が眼を輝かせながら、小声で言う。

「それも見てみたいけどね……」

近くにいた女子が、やはり小声で言い返した。

「笑えるかって言ったら……無理だよね」

皆が納得する中、本人だけは控えめに異を唱えた。

「それほど女性的な顔だちではないと思うが……」

ローズがきっぱりと断言する。

「そういう問題じゃない」

「俺の体格で女物の衣服を着れば相当な違和感だ。

それだけで充分、滑稽に見えるはずだよ」

男子の一人が揶揄やゆするように言った。

「——そんなに女装したいのかよ？」

ヴァンツァーは静かな眼をその男子に向けた。

その眼に浮かんでいるのが反感や嫌悪、あるいは侮蔑であつたら、まだましだったかもしれないが、濃い藍色の瞳には何の感情も浮かんでいない。

まったくの無関心ではない。

男子生徒は自然と首をすくめざるを得なくなり、ヴァンツァーは視線と同じく感情のない声で言った。
「学園祭は正式な学校行事だ。好成績を残すために最善と思われる提案をしている。おかしいか？」

「正論で返すなよ……」

小声で言つて、その男子生徒は続けた。

「けどさ、ヴァンツァーの女装じゃあ笑えないって、ローズは言ってるぜ。——俺たちもだけどさ」

「笑いをとるのが目的なら顔をつくればいいだろう。頬に詰め物をして下ぶくれにして、舞台用の化粧で頬や唇を大きく真っ赤に塗れば……」

ローズが顔色を変えて叫んだ。

「却下！ もったいない！」

再びクラス中が揃つて頷いたが、『見たい』派の

女子の一人が諦めきれない口調で提案した。

「それなら、笑いは諦めて、男女逆転のシリアスを目指すのどうかな。ヴァンツァーがアウローラで、ローズかベアテがアウレーリオをやったら？」

指名されたベアテは早々に両手を上げた。

「わたしは演出で手一杯だよ」

ローズも首を振っている。

「こつちは総制作者兼舞台監督。山ほど雑用があるんだから、とてもじゃないけど舞台に立っている暇はない。それ以前の問題として、却下の理由その二がある。——女子全員に質問するけど」

ローズは妙に据わつた眼で教室をぐるりと見渡し、ヴァンツァーにまつすぐ指を突きつけた。

「彼がアウローラだと仮定する。この顔を前にして、あの熱烈な愛の台詞を最後までつかえずに堂々と言い切れるって自信のある人は手を上げて」

「……………」

どこからも手は上がらなかった。

それどころか、女生徒一同、無言で、いつせいに首を振った。

男子生徒は大いに納得した様子で頷いている。

「ちよっと……厳しいかもな」

「けどさ、それなら逆転劇じゃなくても同じだろう。ヴァンツァーがアウレーリオをやるのはいいとして、相手役はどうするんだ？」

「これ見るとアウローラもアウレーリオに、かなり大胆な台詞をしゃべってるぜ」
だいたん

ローズが頷いた。

「そう。それも問題なの。台詞をちゃんと言えたら言えたで、その子は学校中の女子から確実に非難と怨嗟の眼差しを向けられる。それだけならまだしも、最悪の場合、『ずるい』って敵認定されかねない」

ヴァンツァーが静かに言った。

「俺はそんな危険人物か？」

「あなたはちよっと黙ってて。——そこで提案」

ローズは言葉を切り、その後を受けて、ベアテが

おもむろに言った。

「出演者は全員、男子にやってもらおうと思う」

クラス中が、ざわつとどよめいた。

女装なんかいやだ！ とあくまで抵抗する男子も多いだろうが、『受ける、おもしろそうじゃん』と乗り気になる男子生徒もいる。

ベアテが『やりたい人は手を上げて』という前に、そんな性格の一人がさっそく手を上げた。

「じゃあ俺！ 俺がやる！」

マイケル・ケント。通称ミツクはいかにも元気な

お調子者で、クラスの雰囲気盛りあげ役でもある。

もう一人、手を上げたのはステイブ・バリィ。

ちよっと太めの彼は哲学者のような雰囲気ながら闊達な性格で、何より彼も演劇部である。
かつたう

ベアテが確認するようにステイブに訊いた。

「ステイブはドルガじゃないのかい？」

「確かに。そっちが本命だけど、ぼくが女装したら、間違いなく笑いがとれる」

穏やかな口調でステイブは言った。

「最終的にドルガに決めるとしても、挑戦するのは自由だろう。何より、ヴァンツァーが本当にぼくのアウローラに吹き出さずに台詞を言えるかどうか、興味があるんだ。試金石として役にたとう」

「ご協力、感謝」

ローズが生真面目な口調で言い、ベアテも頷いて、今度はミックに問いかけた。

「シリアス路線で行くんだから、おふざけはなしだ。できるのかな？」

「あつたり前じゃん」

ミックは得意げに胸を張ってみせた。

「ここで俺が、捕まったかわいそうな王女になって、くっ、そ真面目にヴァンツァーとラブシーンやるのが一番受けるんだろ？」

「正しい認識だ」

受けるためには何でもやるという姿勢を評価して、ベアテは笑って頷いた。

ローズが同級生を促した。

「それじゃあ、みんな、机を動かして」

全員が席を立ち、机と椅子を教室の後方に片付け、前方の空間を大きく開ける。

「ここが舞台のつもりで。みんなはそっちで観客ね。」

——まずミックとヴァンツァー——

生徒のほとんどは片付けた椅子や机に腰を下ろし、ミックは端末を手に意気揚々^{いきようよう}と前に出た。

ヴァンツァーも進み出たが、彼は手ぶらである。

ローズが訊いた。

「端末は？」

「台本なら記憶した」

ローズもベアテも何とも言えない顔になった。

「……あれ全部？」

「……結構な行数だよ？」

「問題ない。どちらの台詞も言える。俺がやるのはアウレリオでいいのか？」

ベアテが呆れたように笑っている。

「さすがは学年首席と言うべきかな。——そうだよ。あなたがアウレーリオ」

ミックが言った。

「で、俺がアウローラな。それじゃあ……」

台詞を言おうとしたミックを静かな動作で遮つて、
ヴァンツァーは言った。

「質問がある。アウレーリオが魔法使いか？」

クラス中が、きよとなった。

ミックが呆れたように言う。

「何言ってるんだよ。魔法使いはドルガだろ」

ヴァンツァーは怪訝そうな顔になって、ベアテに尋ねた。

「アウレーリオが主役ではないのか？」

「そうだよ。主役の一人」

「では、この作品は例外なのか？」

今度はベアテとローズが不思議そうな顔になり、ベアテが率直に尋ねた。

「何を質問しているのかな？」

「映画や芝居では通常、表題役タイトルロールが主役だと聞いた。

『極光城の魔法使い』という演目で、ドルガが魔法使いなら、主役はドルガだと思うが、違うのか？」

全員、今度こそ啞然あぜんとしてヴァンツァーを見た。

ローズがおそろおそろ確認する。

「もしかして『極光城の魔法使い』を知らないとか、言わないよね？」

「知らん」

女生徒たちが「ええっ!？」と思わず声をあげて、慌てて口を押さえる。そんな彼女たちに、内心では大いに同意しながら、ベアテは説明した。

「有名な古典劇だよ。題タイトルも聞いたことがない？」

「ない」

ミックが呆れたように言う。

「詳しい筋は知らないけど、題名くらい俺だって知ってるぜ。悪い魔法使いに捕まった王女を助けてハッピーエンドって話だろ」

ヴァンツァーはまたしても首を傾げた。

「ドルガは悪役なのに表題になっているのか？」

「それが、一概に悪役とも言い切れないんだよ」

ベアテが言った。

「ざっと説明すると、おおまかな筋は、ミックが今言ったとおりだ。アウローラはシモーネ王国の王女で十六歳。極光城の魔法使いのザアラにさらわれて城の一角に閉じ込められている」

「魔法使いは二人いるのか？」

「今の極光城の主は黒い魔女のザアラ。その息子がドルガだよ。ザアラは息子に偏執的なまでの愛情を注いでいて、息子の花嫁にするためにアウローラをさらうんだ」

ヴァンツァーは表情一つ変えずに言つてのけた。

「母親が力づくで嫁を用意するとは、呆れた話だ。」

ドルガはそんな花嫁を喜んで受け取るのか？」

「すぐには受け取らない。なぜなら、アウローラは死ぬほどドルガを嫌っているからね」

「ドルガが悪い魔法使いだからか？」

「ドルガが醜いからだよ」

ヴァンツァーは独り言のように呟いた。

「浅薄にすぎるが、十六の娘ならそんなものか」

「ドルガはドルガなりに真剣にアウローラを愛しているんだけどね、アウローラは徹底的に彼を拒絶。すると、母親のザアラが心配しなくてもいいと言う。アウローラには守りの魔法が掛けられていて、今は自分も手出しできないが、彼女の十七歳の誕生日に守りの魔法は効力を失う。『そうしたら、わたしがあの娘の心に魔法を掛けてやるよ。見ていてごらん。あの娘は心底おまえを愛するようになるからね』と、息子を励ますんだ」

ヴァンツァーは再び無表情に言つてのけた。

「溺愛もそこまでくると害悪だな」

ベアテも頷いた。

「ザアラは歪んだ母性愛の象徴として描かれている一面もあるんだ。ドルガは母親の『おせっかい』を疎ましく思いながらも、アウローラが本当に自分

を愛してくれたら——と心を躍らせてもいる」

「それをアウローラも知っているのか？」

「知っている。『どんなに意地を張っても無駄だよ。十七歳になったら、おまえはドルガを愛するようになるのだ』とザアラから宣言されて、アウローラは絶望する。悪の魔法に屈するものかと懸命に自分を鼓舞するも、ザアラが強大な魔力を持っているのもわかっている。守りの魔法の効力が切れたら、顔を見るのもおぞましいあの魔法使いの息子を、自分は愛するようになるというのか。自分の心はそこまでザアラに操られ、変えられてしまうのかと戦慄する。いつそのこと死んだほうがましだと思いがちでも、命を絶つだけの勇気が出ない。『十七歳の誕生日はわたしが死ぬ日』『今のわたしという存在が永久に失われてしまう日』と悲嘆に暮れながら、ドルガを拒んでいる。そこにアウレーリオがやってくる」

「……………」

「アウローラの父、シモーネ国王は娘の肖像画を

広場に掲げて勇者を募った。極光城の魔法使いから娘を救ってくれた者には『褒美として娘と、将来はこの国をも与えると約束する』とね。流浪の騎士のアウレーリオはシモーネ王国に立ち寄り、肖像画を一目見てアウローラに恋をした。村人に話を聞くと、今までにも何人もの勇者が大勢の家来を引き連れて極光城に向かったが、誰一人として戻らないという。彼は必ずアウローラを助け出すと決意して、単身、極光城に向かうんだ。——台本はここからだよ」

「なるほど……」

ヴァンツァーは頷いた。そうした背景を知ると、台詞の意味もまた違ってくるものだ。

ベアテはさらに、別の注意をした。

「クライマックスだけの上演なら、主な登場人物はアウローラ、アウレーリオ、ドルガ、ザアラ、この四人だけなんだ。ひよっとしたら、回想でシモーネ国王を入れるかもしれないけど。基本的には四人で芝居が進むと思ってくれていい。だから、相手役と

息が合うかどうか、その点も重要になる」

ローズが演技経験のないヴァンツァーのために、簡単な指示を出す。

「本番ではマイクを使うけど、これは舞台劇だから、大げさなくらいのしゃべり方がいいと思う。抑揚もなるべくはつきり、聞きとれるようにお願い」

「わかった」

頭の中で状況を整理して、ヴァンツァーは教室の前の開けた空間に立った。

ミックが少し離れたところに立っている。

ベアテとローズは即席の観客席の最前列に座った。

二人を同時に見るためだ。

「始めようか。——アウローラから」

ベアテの指示を受けて、ミックはせいぜい裏声をつくって、心許なさそうな口調で台詞を言った。

「そこにいらっしゃるのはどなた？」

何人かが吹き出しそうになって、急いで飲み込む。

ここで笑うわけにはいかない。

『本命』はこの後のアウレーリオなのだから。

そのヴァンツァーの表情が変わった。

見ていた生徒たちが息を呑むほどの変化だった。

いつも無表情の彼の顔が溢れんばかりの愛情に輝いて、真摯な、ひたむきな眼差しになる。

同級生の男子の顔を『恋する男』そのものの眼で見つめながら、憧れと苦悩とを顔中に浮かべながら、ヴァンツァーは狂おしいような声で言ったのだ。

「わたしに名などありません。あなたに一目で心を奪われ、あなたの虜となった者です」

相手に対してどんな感情を抱いているのか、眼を閉じて聞いてもわかる、素晴らしい声だった。

教室中が、しんと静まりかえった。

皆、あぐりと口を開けてしまっている。

ベアテも例に洩れなかったが、彼女は演出担当の責任感で、かろうじて、かすれた声を発した。

「……アウローラ。台詞」

しかし、もつとも硬直していたのが、この台詞を

真正面からぶつけられたミックだ。茫然自失状態ぼうぜんじしつで立ち尽くしていた。慌てて我に返る。

「は!! えっ、えっと……」

瞬時に表情を消したヴァンツァーが言う。

「そんな台詞はない」

「ちよつ、ちよつと待て!」

ミックはぶるぶる頭を振って、猛然と抗議した。

「何だよ! 演技経験ないんじゃないやなかったのか!!」

「ない」

嘘ではない。少なくとも芝居小屋の舞台に立ち、

木戸銭きどせんをもらう演技はしたことがない。

しかし、『別人を演じた』経験なら何度もある。

その時はもつと自然な芝居を心がけたが、他人の役割を与えられること、そのとおりに振る舞うことは、ヴァンツァーには当たり前の日常だったのだ。

同級生たちはそんなことは知る由もないので、皆呆気にとられている。

度肝を抜かれたと言っても過言ではない。

ステイブが真剣な顔で唸った。

「どう聞いても素人の発声じゃあない……」

ローズも呆然と呟いている。

「こんなところで優等生とは思わなかった……」

ベアテも興味津々の様子で尋ねたのである。

「すごいね。初心者だなんて信じられないよ。何か参考にした演技術や表現法があるのかな?」

ヴァンツァーは首を振った。

「何も。俺はアウレーリオのふりをしたただけだ」

生徒たちは再び呆れ返った。

「ふりって……」

「だけって……」

文字通り、開いた口がふさがらない。

ベアテはますます熱心に身を乗り出した。

「ふりって言うけど、アウレーリオは架空の人物だ。『極光城の魔法使い』を知らないなら、今まで彼を演じた役者も一人も知らないんだよね。見たことのない人のふりを、どうやってしたって言うんだい」

なかなか鋭いところをついてくる。

美貌^{びぼう}の少年は少し考えた。

「半分は俺の想像だ」

「残り半分は？」

「経験則だ。恋煩^{こいわずら}いの男を何人か見たことがある。

その様子を参考にした」

「それじゃあ、今の台詞は『恋煩いをしている男』

として言っただね？」

「そのつもりだった。——いけなかったか？」

「とんでもない。苦悩する男の様子がよく出ていた。

それなら、ヴァンツァー」

ベアテは密^{ひそ}かな興奮に眼を輝かせている。

「こんな人物を演じてほしいという希望を出したら、
やつてもらえるのかな？」

「たとえば？」

「そう……たとえば、アウレーリオはアウローラを
肖像画でしか知らない。今初めて本物の彼女を見た。

だから、恋煩いで苦悩する男というよりも、愛する

人の姿をやつとこの眼で確かめられた。おお、神よ、
肖像画など足下にも及ばない美しさだ！　そういう
気持ちの高ぶりを表現してみてくれないかな」

何と無茶な注文をするのかと生徒たちは呆れたが、
本人はあっさり頷いた。

「理解した。明るい情熱的な男だな」

「そう！　それ」

他の生徒は何とも言えない顔で沈黙している。

(明るい……)

(情熱的……)

およそ平常のヴァンツァーからはもつとも縁遠い
二大形容詞である。

ステイーブが立ち上がった。

「代わってくれ、ミック」

「……もうかよ？　俺、一言しゃべっただけだぜ」

「失礼は承知で言うが、これはきみには無理だ」

「……ちえっ」

舌打ちしたが、ミックは素直に観客席に下がった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。